

学生のレポートライティングへの課題意識と 初年次ライティング指導への期待の関連

近藤裕子 石川勝彦

はじめに

近年、大学初年次教育の1つとして「レポート・論文の書き方」や「日本語リテラシー」を扱う大学は少なくない。これは、大学で求められるレポートや論文を書くために必要な論理的思考やライティングスキルを身に付けることに目的がある。渡辺（2017）の指摘にあるように、高校で学ぶ意見文・小論文と大学で求められるレポートでは“意見を述べる”という点で共通点はあるが、初年次の学生は、文章を組み立て、引用、推敲等の具体的技術と再帰的な文章作成の学習経験が少ない。これは、近藤ほか（2017）による大学初年次の学生を対象とした文章作成に関するレディネス調査でも明らかになっているように、初年次の学生は資料引用の経験が乏しく、主張の根拠に経験や人から伝え聞いたことなどを提示する傾向があることとも一致する。また、二通（2001）は、アカデミック・ライティングでは論展開が演繹型であるとしているが、上記の調査によれば、大学受験のための小論文指導を受けた経験のある学生は、比較的論構成を意識しているという。このように、高大接続の観点から、初年次の学生が、「何ができて何ができないのか」を明らかにし、指導内容・指導方法を検討する必要がある。

その一方で、初年次ライティング指導のゴール設定はさまざまである。

果たして、初年次で行うライティング教育は、専門科目等で求められるレポートや論文作成にどのような影響を与えているのだろうか。

本稿では、初年次ライティング教育と専門教育で求められているレポート作成とを接続させることを目的とし、専門教育を担当する教員がどのような狙いでレポートを課し、それらをどのように評価するのか、さらには、専門教育担当教員が初年次ライティング教育に期待する教育内容は何かについて調査を行う。そして、そこで得られた結果を踏まえ、初年次ライティング教育のカリキュラムの見直しに繋げていきたい。

方法

調査の概要

2019年1月、山梨県内のA大学の専任教員を対象に質問紙ないしはwebフォームでの回答を依頼した。140人中67名から回答を得た（回収率47.85%）。なお一部未回答の項目を含む回答票が存在するため、分析によっては67名を下回るサンプルで分析を進めることがある。

項目

フェイス項目 氏名、専門領域を自由回答にて尋ねた。専門領域は人文科学、社会科学、自然科学の3クラスターにコードしてのちの分析に利用した。内訳は人文科学19名、社会科学33名、自然科学15名だった。

論題 回答にあたり想定した論題タイプを回答してもらった。「①授業の内容をまとめたもの」「②授業やあるテーマに関する感想を記したもの」「③ある事柄について文献調査したもの」「④ある事柄について文献調査し、そのうえで意見や考察を記したもの」「⑤ある事柄について文献調査

し、比較検討し見解を述べたもの」「⑥あるテーマについて自分の考え（主張）を根拠提示しながら述べるもの」「⑦アンケート調査やインタビューを行い、それをまとめたもの」「⑧実験結果をまとめたもの」の項目について「0 = 該当なし、1 = 該当あり」の2値で回答を求めた。

出題意図 レポートを課す狙いを以下の4項目にて尋ねた。「①授業の理解度を測るため」「②授業内で学んだ知識を活かし、応用的に論じられるかを測るため」「③アカデミック・リテラシーをトレーニングするため」「④アカデミック・リテラシーの習得レベルを測るため」の4項目とした。「5当てはまる～1当てはまらない」の5件法とした。

問題点 学生が執筆したレポートで特に問題だと考える点を尋ねた。「①提出期限を守らない」「②字数が足りない」「③テーマ（レポート論題）からずれている」「④コピペが疑われる」「⑤論理性に欠いている」「⑥理解が足りない」「⑦日本語の文章が不適切だ」「⑧資料の使い方（引用）が不適切だ」「⑨レポートの構成が不適切だ」「⑩体裁が不適切だ」「⑪レポートではなく感想文・作文の域を脱していない」「⑫新たな事実の発見や見解が足りない」の12項目、5件法（「5当てはまる～1当てはまらない」）で尋ねた。

初年次ライティング指導へのニーズ 初年次ライティング教育で身に付けさせてほしい事柄について、「①日本語の文章技法」「②語彙力」「③読解力」「④発表力」「⑤資料検索スキル」「⑥引用の仕方」「⑦論理性」「⑧問い立て」の8項目を5件法（「5当てはまる～1当てはまらない」）で尋ねた。

分析

まず測定した変数の因子構造を確かめるため、各変数の項目群に対し主成分分析を施した。得られた主成分の尺度得点をその後の分析に利用した。教員の専門領域によってどのように分布するか確かめるため、専門ごとに

平均値を算出した。

2つの問いに取り組むため、以下の分析を行った。第1に学生が執筆するレポートのどのような点に問題意識を持つのか、その背景を探ることを目的とする。具体的には問題点の主成分をそれぞれ目的変数、論題、出題意図、加えて交互作用を説明変数とする重回帰分析を行った。第2に初年次教育にライティング指導を期待する背景を探ることを目的とする。具体的には初年次教育ライティング指導への期待に関する主成分をそれぞれ目的変数、出題意図、問題点、対応する交互作用を説明変数とする重回帰分析を行った。

結果と考察

因子分析

論題の8項目を対象に平行分析を行ったところ、対角SMCが2因子、MPAが1因子を提案した。2因子を指定してカテゴリカル因子分析（プロマックス回転）による因子分析を行った。いずれの因子にも.40以上の因子負荷を示さない項目、複数の因子に.40以上の因子負荷を示す項目を削除し再度カテゴリカル因子分析（プロマックス回転）を行ったところ、適切な因子負荷量を示しかつ解釈可能な因子構造が得られた。第1因子には「⑤ある事柄について文献調査し、比較検討し見解を述べたもの」「④ある事柄について文献調査し、そのうえで意見や考察を記したもの」など文献調査を中心とした論題がまとまったため「調査型レポート」と命名した。第2因子には「①授業の内容をまとめたもの」「②授業やあるテーマに関する感想を記したもの」など授業内のテーマへの応答を中心とした論題がまとまったため「授業内レポート」と命名した（Table1）。

出題意図の4項目を対象に平行分析を行ったところ、対角 SMC が2因子、MPA が1因子を提案した。2因子を指定して主成分分析（プロマックス回転）による因子分析を行った。第1因子には「④アカデミック・リテラシーの習得レベルを測るため」「③アカデミック・リテラシーをトレーニングするため」の2項目がまとまったため「アカデミック・リテラシーの訓練・評価」と命名した。第2因子には「②授業内で学んだ知識を活かし、応用的に論じられるかを測るため」「①授業の理解度を測るため」の2項目がまとまったため「授業内容の理解度」と命名した（Table2）。

問題点に関する12項目を対象に平行分析を行ったところ対角 SMC が4因子、MAP が2因子を提案した。2～4因子で主成分分析（プロマックス回転）を行い解釈可能性の観点から4因子構造を採用した。いずれの因子にも.40以上の因子負荷を示さない項目を削除し再度主成分分析（プロマックス回転）を実行した。第1因子には「④コピペが疑われる」「⑦日本語の文章が不適切だ」「⑤論理性に欠いている」など提出されたレポートに基本的な欠陥があることを伺わせるまとまりとなったため「基本的な不備」と命名した。第2因子には「⑩体裁が不適切だ」「⑨レポートの構成が不適切だ」「⑧資料の用い方（引用）が不適切だ」と、形式に関する不備に関する項目がまとまったため「形式面の不備」と命名した。第3因子には「①提出期限を守らない」「②字数が足りない」「③テーマ（レポート論題）からずれている」など内容、形式以前の前提にあたる解釈できる部分の不備であるので「前提の不備」と命名した。第4因子には「⑩新たな事実の発見や見解が足りない」の1項目となったため「発見の不足」と命名した（Table3）。

初年次ライティング指導へのニーズの8項目に平行分析を適用したところ、対角 SMC、MAP がともに2因子を提案した。2因子を指定して主成分分析（プロマックス回転）を行ったところ、適切な因子負荷量が得ら

れた。第1因子は「⑤資料検索スキル」「⑧問い立て」「⑥引用の仕方」などレポートを作成するために必要なプロセスの全体を示していると解釈し「レポート作成スキル」と命名した。第2因子は「②語彙力」「①日本語の文章技法」「③読解力」など、レポート作成の前提となると解釈できるスキルがまとまったため「前提スキル」と命名した (Table4)。

回答者の専門領域別の平均値を Table5に整理した。統計的には専門領域間に平均値の差はみられなかった $F(2,42)=1.481$, $\eta^2_p=.066$, $p=$

Table 1 論題の因子パターン

Item	F1	F2	共通性
⑤ある事柄について文献調査し、比較検討し見解を述べたもの	.78	.21	.68
④ある事柄について文献調査し、そのうえで意見や考察を記したもの	.69	-.18	.49
③ある事柄について文献調査したもの	.64	.02	.41
⑥あるテーマについて自分の考え(主張)を根拠提示しながら述べるもの	.46	-.13	.22
①授業の内容をまとめたもの	.01	.77	.59
②授業やあるテーマに関する感想を記したもの	-.09	.76	.58
因子寄与	1.71	1.26	
α 係数	0.50	0.35	
ω 係数	0.72	0.74	

Table 2 出題意図の因子パターン

Item	F1	F2	共通性
④アカデミック・リテラシーの習得レベルを測るため	.98	-.05	.93
③アカデミック・リテラシーをトレーニングするため	.94	.04	.92
②授業内で学んだ知識を活かし、応用的に論じられるかを測るため	-.13	.96	.83
①授業の理解度を測るため	.19	.76	.72
因子寄与	2.17	1.83	
α 係数	.92	.66	
ω 係数	.96	.88	

Table 3 問題点の因子パターン

Item	F1	F2	F3	F4	共通性
④コピペが疑われる	.93	-.33	.01	-.03	.68
⑦日本語の文章が不適切だ	.93	.07	-.11	.23	.70
⑤論理性に欠いている	.57	.24	.03	-.21	.72
⑪レポートではなく感想文・作文の域を脱していない	.52	.20	.17	-.10	.65
⑩体裁が不適切だ	-.06	1.00	-.02	.17	.84
⑨レポートの構成が不適切だ	-.16	.98	.07	.01	.88
⑧資料の用い方(引用)が不適切だ	.09	.69	-.12	-.31	.74
①提出期限を守らない	-.03	.02	.95	.27	.80
②字数が足りない	-.11	-.11	.81	-.34	.73
③テーマ(レポート論題)からずれている	.31	.14	.57	.03	.76
⑫新たな事実の発見や見解が足りない	-.08	-.03	-.05	-.97	.85
因子寄与	4.00	3.82	3.48	2.19	
α 係数	.79	.87	.77	---	
ω 係数	.88	.93	.90	.85	

Table 4 初年次ライティング指導へのニーズの因子パターン

Item	F1	F2	共通性
⑤資料検索スキル	.93	-.07	.84
⑧問い立て	.84	.02	.72
⑥引用の仕方	.81	-.10	.60
④発表力	.69	-.01	.48
⑦論理性	.48	.38	.51
②語彙力	-.04	.89	.76
①日本語の文章技法	-.17	.86	.68
③読解力	.31	.49	.45
因子寄与	3.32	2.33	
α 係数	.83	.68	
ω 係数	.89	.83	

Table 5 専門別の各変数の要約統計量

		人文科学		社会科学		自然科学	
		平均値	SD	平均値	SD	平均値	SD
初年次ニーズ	レポート作成スキル	3.94	0.89	4.30	0.54	3.87	0.88
	前提スキル	4.37	0.43	4.37	0.53	4.47	0.59
出題意図	アカデミック・リテラシーの訓練・評価	3.80	1.34	3.45	0.96	3.04	1.27
	授業内容の理解度	4.25	0.68	4.26	0.94	4.46	0.58
論題	調査型レポート	0.33	0.31	0.35	0.26	0.19	0.30
	授業内レポート	0.25	0.35	0.33	0.40	0.33	0.39
問題点	基本的な不備	3.45	1.03	3.75	0.64	3.79	0.88
	形式面の不備	3.50	0.97	3.63	0.69	3.31	1.09
	前提の不備	2.77	1.18	3.06	0.96	2.92	1.10
	発見の不足	3.50	1.18	3.71	1.01	3.08	0.90
評価の観点	形式	4.32	0.46	4.05	0.63	4.07	0.78
	作成の努力	3.55	1.30	3.81	0.73	3.75	1.18
	内容	3.50	0.78	4.07	0.66	4.04	0.92
フィードバック	フィードバック	0.18	0.24	0.11	0.17	0.17	0.22

.239。

問題点に対する回帰分析

問題点がどのような背景に基づいて構築されているのか、その背景を探った。具体的には重回帰分析を用いて探索した。問題点の4つの下位因子をそれぞれ目的変数、論題の2因子、出題意図の2因子、これらの交互作用を目的変数とする重回帰分析を繰り返した (Table6)。

主効果を見ると、有意傾向にとどまるが、出題意図の「アカデミック・リテラシーの訓練・評価」が「基本的な不備」と「前提の不備」に負の影響、「発見の不足」に正の影響を示した。

調査型レポート×アカデミック・リテラシーの訓練・評価、および調査型レポート×授業内容の理解度の交互作用が有意もしくは有意傾向を示し

たので単純傾斜を確認した (Figure1)。

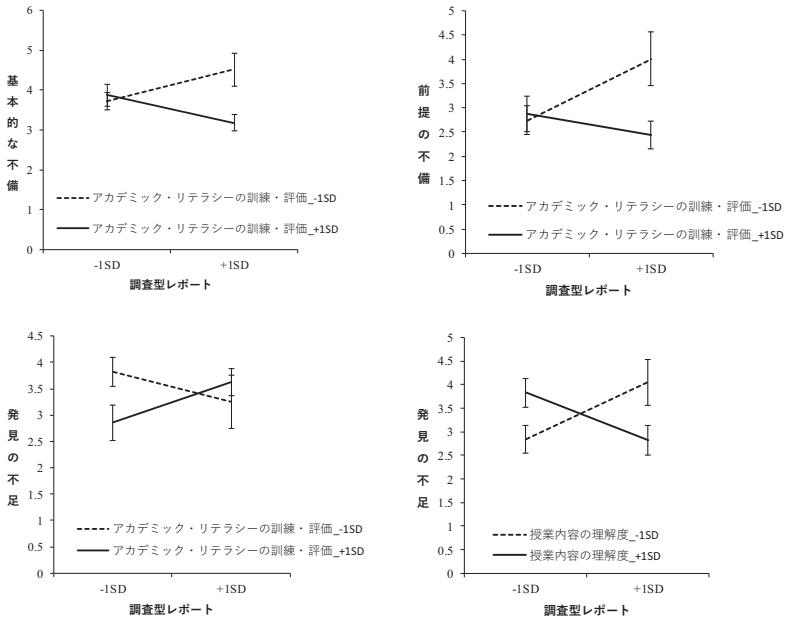
調査型レポート×アカデミック・リテラシーの訓練・評価の「基本的な不備」「形式面の不備」への単純傾斜をみると、アカデミック・リテラシーの訓練・評価を重視しており (+1SD)、かつ調査型レポートを課している場合に、「基本的な不備」「形式面の不備」を重視していない傾向がみられた (「基本的な不備」アカデミック・リテラシーの訓練・評価-1SD : $b=1.528, \beta = .511, SE=0.898, t(38) = 1.701, p=.097$; アカデミック・リテラシーの訓練・評価+1SD : $b=-1.336, \beta = -.447, SE=0.633, t(38) = -2.111, p=.041$) (「形式面の不備」アカデミック・リテラシー-1SD : $b=2.439, \beta = .613, SE=1.224, t(38) = 1.992, p=.054$; アカデミック・リテラシー+1SD : $b=-0.841, \beta = -.212, SE=0.863, t(38) = -0.976, p=.335$)。こうしたケースで重視されていたのは「発見の不足」であった (アカデミック・リテラシーの訓練・評価

Table 6 問題点の4因子をそれぞれ目的変数とする重回帰分析

変数名	基本的な	形式面の	前提の	発見の
	不備	不備	不備	不足
論題				
調査型レポート	.03	.06	.20	.05
授業内レポート	-.05	-.03	.05	-.18
出題意図				
アカデミック・リテラシーの訓練・評価	-.33 ⁺	-.04	-.29 ⁺	-.12
授業内容の理解度	-.23	-.21	-.22	-.05
交互作用				
調査型レポート×アカデミック・リテラシーの訓練・評価	-.42 [*]	-.28	-.36 ⁺	.28 ⁺
授業内レポート×アカデミック・リテラシーの訓練・評価	-.05	-.09	.01	.01
調査型レポート×授業内容の理解度	-.20	-.17	-.14	-.48 ^{**}
授業内レポート×授業内容の理解度	.17	.27	.28	.15
R^2	.25 ^{**}	.10 ^{**}	.21 ^{**}	.32 ^{**}

^{**} $p < .01$, ^{*} $p < .05$, ⁺ $p < .10$

Figure 1 問題点の4因子をそれぞれ目的変数とする重回帰分析の単純傾斜分析



-1SD : $b = -1.090$, $\beta = -.277$, $SE = 1.126$, $t(38) = -0.968$, $p = .339$;
 アカデミック・リテラシーの訓練・評価+1SD : $b = 1.475$, $\beta = .375$,
 $SE = 0.793$, $t(38) = 1.859$, $p = .071$ 。1-1

調査型レポート×授業内容の理解度が発見の不足に交互作用を示した (Figure1)。単純傾斜を見たところ、授業内容の理解度を重視しない場合 (-1SD)、調査型レポートを課しているケースでは、発見の不足を強く認識する傾向がみられた ($b = 2.320$, $\beta = .589$, $SE = 1.026$, $t(38) = 2.260$, $p = .030$)。他方、授業内容の理解度を重視する場合 (-1SD)、調査型レポートを課しているケースでは、発見の不足を感じにくくなる傾向がみられた ($b = -1.935$, $\beta = -.492$, $SE = 0.804$, $t(38) = -2.406$, $p =$

.021)。

結果をまとめると、レポートをアカデミック・リテラシーの訓練・評価の場と位置付ける場合には、基本的な不備や形式面の不備はあまり気にしなくなる傾向がみられた。その代わりに「発見の不足」があるかどうか重視している点が特徴的であった。レポートをアカデミック・リテラシーのトレーニングの場とみなす信念を持っている場合、レポートにはあくまで内容面への評価を重視しており、書かれた内容に発見や新しさがあるかといった質を求める傾向が伺えた。つまり重要なことは形式面が整っていることではなく、調査に取り組んだ結果、発見的な面白さにたどり着いているかどうかである、との見識が透けて見える結果であった。レポート論題がどのようなスタイルのものであるかではなく、アカデミック・リテラシーを重視するかどうかといった「出題意図」が、レポートの問題点の認識と強く結びついていることが見えてきた。

初年次教育へのニーズに対する回帰分析

どのような背景をもった教員が、初年次ライティング指導にどのようなニーズを有するのか探索する。具体的には初年次ライティング指導へのニーズの2因子をそれぞれ目的変数、出題意図の2因子、問題点の4因子を説明変数とする重回帰分析を繰り返した。交互作用は、アカデミック・リテラシーの訓練・評価と授業内容の理解度をそれぞれ分けてモデルに投入したため、都合4つのモデルを推定した (Table7)。

主効果をみてみると、アカデミック・リテラシーの訓練・評価は「レポート作成スキル」へのニーズと正の関連を示した。一方、一部有意傾向を含むが、授業内容の理解度は「レポート作成スキル」へのニーズと負の関連を示した。

問題点の下位因子の主効果を見てみると、発見の不足が「レポート作成スキル」へのニーズと正の関連を示した。

ここまでの結果をまとめると、アカデミック・リテラシーの獲得を目指してレポートを課している場合は、初年次のライティング科目にレポート作成スキルの育成を強く期待していることが伺えた。他方レポートを授業内容の理解の確認ととらえている場合には、初年次のライティング科目にレポート作成スキルを期待しない傾向がみられた。またレポートに発見的なおもしろさが不足していると感じている場合にも、初年次教育にライティング指導を求めている。このことから、学生にアカデミック・リテラシーを習得させたいと考えることが、初年次からライティング指導が必要不可欠であるとの認識を条件づけていることが見えてきた。

交互作用を確認する (Figure2)。なお授業内容の理解度を含む4つの交互作用をすべて投入すると VIF が不良となるため、最も VIF が不良な基本的な不備×授業内容の理解度の交互作用をモデルから除外した。

アカデミック・リテラシーを含む交互作用はいずれも有意にならなかった。したがって4つの問題点をどの程度問題視するかの媒介効果はなく、アカデミック・リテラシーの訓練の必要性の認識がレポート作成スキルへのニーズを支えているといえる。

授業内容の理解度を含む交互作用の単純傾斜をみる。レポート作成スキルに対しては、形式面の不備×授業内容の理解度、前提の不備×授業内容の理解度の2つの交互作用が有意だった。授業内容の理解度を重視している場合、形式面の不備を問題にするほどレポート作成のスキルへのニーズが高く $b=0.975$, $\beta=1.232$, $SE=0.294$, $t(34)=3.312$, $p=.002$ 、前提の不備を問題にするほどレポート作成スキルへのニーズが高かった $b=0.495$, $\beta=.699$, $SE=0.196$, $t(34)=2.529$, $p=.016$ 。前提スキルに対しては、形式面の不備×授業内容の理解度が有意であり、授業内容の理

Table 7 初年次ライティング指導へのニーズを目的変数とする重回帰分析

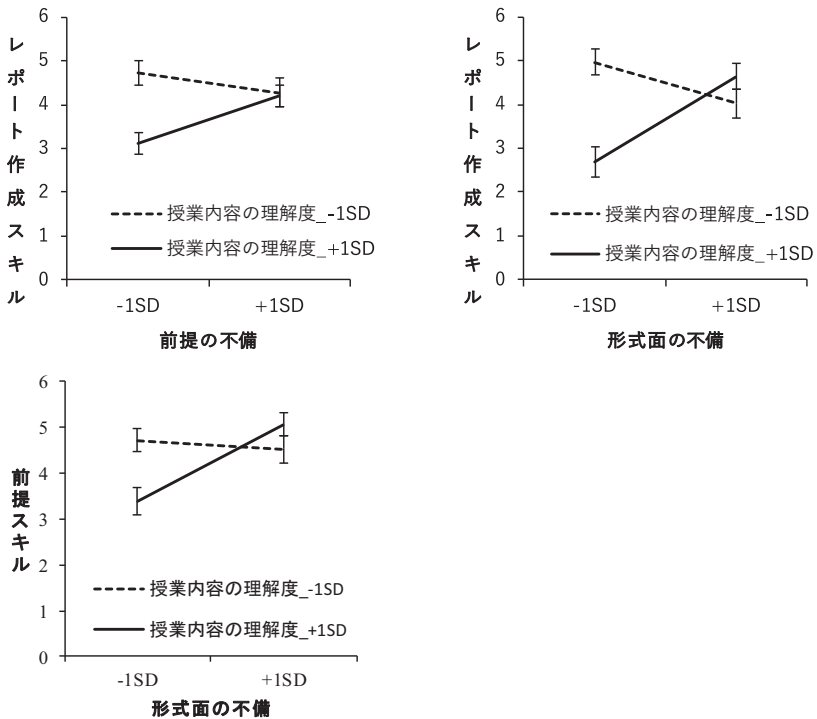
変数名	レポート作成スキル	前提スキル	レポート作成スキル	前提スキル
出題意図				
アカデミック・リテラシーの訓練・評価	.50**	.21	.45**	.25
授業内容の理解度	-.23 ⁺	-.10	-.49**	-.33 ⁺
問題点				
基本的な不備	-.06	-.14	-.30	-.47
形式面の不備	.03	.41	.32	.68**
前提の不備	.09	-.08	.21	.14
発見の不足	.41**	-.04	.47**	.01
交互作用				
基本的な不備×アカデミック・リテラシーの訓練・評価	-.09	-.05		
形式面の不備×アカデミック・リテラシーの訓練・評価	.23	.00		
前提の不備×アカデミック・リテラシーの訓練・評価	-.29	-.02		
発見の不足×アカデミック・リテラシーの訓練・評価	-.19	.09		
形式面の不備×授業内容の理解度			.81**	.76*
前提の不備×授業内容の理解度			.43 ⁺	.13
発見の不足×授業内容の理解度			.05	-.01
R2	.45**	.18**	.59**	.34**

** $p < .01$, * $p < .05$, ⁺ $p < .10$

解度を重視している場合、形式面の不備を問題視するほど前提スキルの育成を初年次ライティング指導に期待する傾向がみられた $b = 0.836$, $\beta = 1.542$, $SE = 0.255$, $t(34) = 3.280$, $p = .002$ 。

授業内容の理解度を含む結果をまとめると、レポートを授業内容の理解を確かめるもの考える場合、学生のレポートに対して問題意識が低い（学生の書いたレポートに課題があるとの認識が相対的に低い）と、初年次ライティング指導へのニーズは低く出る傾向が伺えた。レポートを授業内容

Figure 2 初年次ライティング指導へのニーズを目的変数とする
重回帰分析の単純傾斜分析



の理解度を測るものと位置づけない場合は、レポートの問題点を意識するかどうかにかかわらず初年次ライティング指導へのニーズは高かった。

これらのことから、初年次ライティング指導への期待は、レポート課題の出題意図の在り方に大きな影響を受けることが伺えた。学生のレポートにどのような問題点を見出すかという要因は2次的な影響にとどまると解釈できた。

総合考察

本論は、日々学生が書いたレポートを評価している教員が、学生のレポートのどのような点に課題意識・育成の必要性を感じているか、また初年次ライティング指導にどのような指導上のニーズを抱いているかを明らかにすることを目的とした。

学生が書いたレポートにどのような課題意識・育成の必要性を感じているか調査分析したところ、字数や締め切りを守るなどの「前提の不備」、コピーが疑われるなどの「基本的な不備」、体裁やレポートの構成などの「形式面の不備」、発見的な面白さがないといった「発見の不足」の4つの側面から成ることが見えてきた。

学生のレポートにこのような問題意識を抱く背景を検討したところ、どのような種類のレポート課題を課すか（調査研究型のレポート/授業内容理解の確認のレポート）は2次的な要因であり、影響力が大きいのはレポート課題を通じてどのような知的達成を望むか、その出題意図であることが伺えた。具体的にはレポートを授業内容の理解を確かめる場ではなく、アカデミック・リテラシーの訓練・評価の場であると考えている場合には、形式面や前提の不備というよりも発見の不足に対し注意が向く傾向がみられた。

初年次ライティング指導へのニーズは、レポートを作成するためのスキルそのもの、および、語彙力・日本語表現のようなレポートライティングの前提と解釈することもできるスキル、の2側面から成っていた。前提スキルへの指導ニーズはレポートを授業内容の理解の確認の場としている場合に生じていた。一方レポート作成スキルの指導ニーズはレポートをアカデミック・リテラシーの訓練と評価の場であると考えている場合に表れて

いた。学生のレポートにどのような課題を感じているかという点は2次的な影響力にとどまった。

実践的なインプリケーションについて考える。初年次ライティング指導へのニーズは、学術研究に耐えうる能力の育成を目指す立場から発出していることが見えてきた。具体的には日本語の表現力ではなく、資料検索・読解と立問を中心とした、汎用的な「リテラシー」の育成が求められていることが見えてきた。このことを踏まえると、初年次ライティング指導に望まれていることは、学生に目の前にあるテーマについて論文や本を読み議論する中で、テーマを十分に焦点化された問いや仮説に叩き上げていく思考力の基礎の育成であると思われる。先行知見の蓄積にアクセスしその到達点を理解するなかでライティングに必要な知的スキルを習得するとともに、テーマに新しい知見を加える力の基礎を訓練してほしい、と解釈することができる。

もちろん、そうした汎用的なりテラシーを育成するにあたって、日本語表現や語彙といった要素が不要である可能性は低いいため、教育プログラムのデザインにあたっては本論の結果を大きく超えた議論が必要となってくるだろう。

教育プログラムを、学生のライティングスキルやリテラシーを踏まえ、専門教育からのニーズに対応する形でデザインするために、以下の研究が有用であると考えられる。

第1に、本論で明らかにした問題点をより細かく掘り下げる研究が必要である。まず実際に書かれたレポートを収集・分析・評価することを通じて、レポートの構成や内容面を精査するなかで学生が苦手とする側面や躓きのポイントを明らかにする必要がある。

第2にレポートライティングの過程に注目したリサーチも重要である。学生たちが立問をどのようなプロセスで進めているのか、資料収集・分析

をどのように進めているのか、データをどのように扱っているのか等、レポート作成のプロセスを分析的に可視化するなかで、学生たちがどのような困難に躓いているのかを明らかにすることは重要である。こちらは実際に学生とともにレポートライティングを進める教育実践を通じて探求するとともに、レポートライティング指導にあたっている教員へのヒアリングも有効と思われる。

謝辞

ご多用中に回答のお手間をいただいた回答者の先生方に、この場を借りましてご協力に心より感謝申し上げます。

引用文献

渡辺哲司・島田康行（2017）『ライティングの高大接続』ひつじ書房

近藤裕子・中村かおり・向井留実子（2017）「大学初年次のアカデミック・ライティング指導に向けたレディネス調査」『日本語教育方法研究会誌』Vol.24 No.1 pp.102-103

二通信子（2001）「アカデミック・ライティング教育の課題—日本人学生及び日本語学習者の意見文の文章構造分析から」『学園論集』110号 pp.61-77, 北海学園大学